

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

病害の発生・被害は全般的には少なかったが、九州北部では8月の低温寡照、台風12号の襲来等の影響が大きかった。

1. 稲・麦

イネいもち病は、粒剤の苗箱施用などにより初期から葉いもちがよく抑えられ、穂いもちもおおむね少発生で経過した。8月の曇雨天で稲が軟弱に伸びたため紋枯病が九州北部でやや多発生、南部では平年並みの発生であった。ばか苗病は昨年より少ないものの、種子消毒の不徹底で全般的に発生が目立った。心枯線虫病は昨年並みの発生であるが、鹿児島で多めの発生であった。基盤整備の進行などのため発生減少の一途にあった白葉枯病が、8月30・31日の台風12号のため佐賀、福岡など北部3県及び熊本では7月の浸冠水もあって、やや多〜多発生した。最近多発生が続いたもみ枯細菌病は、出穂期以降の晴天の持続及び低温少雨のため、久し振りに少発生であった。昨年、一昨年と問題になった縞葉枯病は、福岡、熊本、鹿児島で前年に近い発生があったが、全般的にはヒメトピウカ防除の徹底で、面積的には昨年の55%の発生にとどまった。萎縮病は横ばい状態であるが、依然として広域で発生が続いている。グラッシースタント病は近年にない少発生にとどまった。黄萎病は鹿児島早期、普通期の混作地帯で発生が続き、宮崎、長崎でも発生が目立った。黄葉病は沖縄の二期作で散発的な発生であった。

ムギうどんこ病が全般的に多発生した。赤かび病は昨年より少ないものの発生が目立ち、佐賀などで大麦にやや多発生した。大麦縞萎縮病が熊本、宮崎で播種期の気温が高かったため感染が増加し、やや多発生した。近年発生がみられなかった黒節病が福岡及び大分で多発生した。暖冬による生育の早まり及び春先の積雪、凍霜害が要因と考えられるが、今後の発生動向に注意が必要である。さび病、斑葉病は少発生であった。

2. 野菜・畑作物

トマト、ナス、キュウリ、イチゴの灰色かび病は、本年も施設栽培で全般的に多発生した。イプロジオン剤・チオファネートメチル剤の効力低下が目立ち、薬剤耐性菌が増加している。うどんこ病は一部でやや多発生がみられたが、おおむね平年並みの発生であった。青枯病はナス、トマト、ピーマンともに平年並みの発生、ナスすずかび病が佐賀で、縮疫病が福岡(一部)で、菌核病が鹿児島で、それぞれやや多発生した。トマト葉かび病が大分の夏秋トマトで、根腐萎凋病が宮崎(施設)で、半身萎凋病が鹿児島の夏秋トマトで、それぞれやや多発生

した。疫病、斑点細菌病は、施設栽培では平年並み〜やや少発生であった。夏秋トマトのモザイク病(TMV-トマト系)は各地で散見されている。ピーマンモザイク病(TMV-トウガラシ系)は各地で目立ち、沖縄で葉脈黄化病(仮称)が発生した。

キュウリべと病は平年並みの発生、斑点細菌病、モザイク病は一部でやや多発生したが全般的には平年並み、炭そ病・褐斑病は平年並みの発生であった。スイカつる枯病は平年並みの発生であったが、福岡などで薬剤耐性菌の発生が問題になっている。炭そ病は福岡、長崎でやや多発生、大分、宮崎ではやや少発生であった。カボチャ疫病が宮崎で多発生、沖縄では一部で多発生した。モザイク病が鹿児島、北薩、白斑病が大分でやや多発生した。長崎の露地メロンに斑点細菌病がやや多発生、黒点根腐病が西彼杵郡の一部で発生した。べと病が大分・宮崎でやや多発生した。沖縄では露地のウリ類にTSMVの発生が続いている。

イチゴ炭そ病は鹿児島の一部でやや多発生したが、福岡、佐賀では少発生、輪紋病は佐賀でやや多発生、苗立枯症が佐賀で発生しているが、防除薬剤がないので対策が問題になっている。鹿児島でソラマメ赤色斑点病、菌核病、灰色かび病がやや多発生、エンドウ褐枯病、褐斑病は平年並み〜やや多発生、インゲン菌核病はやや多発生した。キャベツ黒腐病は福岡、熊本(夏秋)・大分(冬)、鹿児島(冬)でやや多発生し、菌核病が長崎でやや多発生、根こぶ病が大分で多発生した。ハクサイ軟腐病が長崎、熊本で、ダイコンべと病が大分で、白さび病が鹿児島の一部で、モザイク病が宮崎で、それぞれやや多発生した。タマネギ白疫病は長崎、鹿児島で、べと病は佐賀、大分でやや多発生、白斑葉枯病は長崎で多発生した。レタス灰色かび病は長崎、大分でやや多発生、べと病は福岡、長崎で、軟腐病は佐賀で、それぞれやや多発生した。ニンジン立枯症が沖縄の一部でやや多発生した。

大豆は8月の曇雨天のため九州北部でべと病がやや多発生、8月末の台風12号の通過後に葉焼病が多発生した。なお、佐賀、福岡では収穫期前後の降雨のため、紫斑病がやや多発生した。ジャガイモ疫病が多雨のため長崎でやや多発生、青枯病、そうか病が秋作でやや多発生、黒あざ病、葉巻病の発生は平年並みであった。サツマイモ立枯病が鹿児島、種子島の一部で発生、黒斑病、黒あざ病は長崎で少発生であった。

3. 果樹

カンキツかいよう病は台風の影響を大きく受けて各県(熊本を除く)でやや多発生した。日焼け(炭そ病)は全般的な多発生となった。夏季の雨天によって果皮が軟弱となり、9月に入ってからの急激な日照りが要因である。黒点病も夏季の天候不順のため、薬剤散布の適期を

失するところが多く、各地で多発生した。灰色かび病も開花期の降雨の影響を受けて発生が増加し福岡、大分でやや多発生、そうか病は佐賀、熊本、大分、鹿児島でやや多発生した。ピワ灰斑病、がんしゅ病、赤衣病、果実腐敗病が鹿児島でやや多発生、長崎ではがんしゅ病、ごま色斑点病ともに平年並みの発生であった。

ブドウべと病、黒とう病は福岡、佐賀、大分で、灰色かび病は佐賀で輪紋病は福岡で枝ぶくれ病は福岡、佐賀、大分でそれぞれやや多発生した。晩腐病、褐斑病は、おおむね平年並みの発生であった。ナシでは黒星病が多発生した。赤星病、うどんこ病、黒斑病は全般的に平年並みの発生であった。カキ炭そ病、うどんこ病は福岡、佐賀で多発生、落葉病は熊本でやや多発生した。モモせん孔細菌病が福岡、大分で、灰星病は福岡、熊本で、それぞれやや多発生した。夏季の長雨が要因である。縮葉病は熊本でやや多発生、大分では苗木で発生が認められた。休眠期の防除不足である。クリ実炭そ病が熊本、大分でやや少～平年並みの発生、疫病(熊本)、斑点病(大分)はともに少発生であった。福岡ではキウイフルーツ灰色かび病がやや多発生した。チオファネートメチル剤耐性菌が増加している。花腐細菌病も多発生、かいよう病が新発生した。沖縄のパンアップル萎凋病、心腐病、バナナ斑葉病、萎凋病は少～平年並みの発生であった。

4. 茶樹

チャ炭そ病が福岡、佐賀、長崎、熊本で、網もち病、もち病が福岡で、それぞれ夏季の多雨のためやや多発生、赤焼病が長崎、鹿児島で、輪斑病が鹿児島、沖縄でやや多発生した。

5. 特用作物

沖縄のサトウキビ黒穂病は、3～4月の高温のため鞭状物の出現が早くやや多発生、鹿児島、熊本地区でも多発生した。葉焼病は両県とも発生が目立ち、さび病は沖縄で並み～やや多発生、鹿児島で少発生であった。

(九州農業試験場環境第一部)

〔害虫発生概況〕

1. 水稲

7月上旬トビイロウンカとセジロウンカの異常飛来があった。その後も8月上旬まで断続的に飛来が続き、昭和55、58年をしのぐ多飛来となった。トビイロウンカ個体群は9月上旬まで増え続けたが、以後登熟期に向かって速やかに少発生状態となる異例な発生経過をたどった。そのため普通期水稲への被害は少なかった。後期少発生の原因は、初期世代の雌成虫の短翅型率が著しく低く、大多数の長翅型羽化成虫が水田から移出分散し、本種に

昭和62年 稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	14,832	3,708	600	5,000	4,480	10,625	6,207	46
穂枝梗いもち	26,170	2,884	200	6,000	4,290	10,372	4,788	48
紋枯病	40,654	21,976	1,500	30,000	24,427	26,753	29,986	315
白葉枯病	2,184	3,450	200	13,000	716	845	254	7
もみ枯細菌病	14,119	5,411	500	2,300	6,500	1,211	7,394	—
縞葉枯病	4,683	2,781	3,000	3,500	1,890	1,518	16,170	4
萎縮病	2,253	573	500	8,500	5,330	8,557	6,219	—
黄萎病	0	0	10	2	—	0	8,503	—
ごま葉枯病	7,284	1,282	3,100	2,500	6,476	4,120	12,793	303
小粒菌核病	0	0	1,000	100	1,290	0	—	—
心枯線虫病	15	0	500	100	10,400	580	5,804	114
(虫害)								
ニカメイチュウ第1世代	4	0	0	15	600	0	0	—
ニカメイチュウ第2世代	5	0	1	20	450	0	0	—
セジロウンカ	54,634	36,900	20,000	45,000	32,950	27,325	35,668	207
トビイロウンカ	33,766	31,269	20,000	39,600	28,190	24,756	31,218	283
ヒメトビウンカ	33,990	4,493	5,000	8,000	2,470	28,155	11,430	127
ツマグロヨコバイ	45,646	25,152	14,000	20,000	14,290	29,854	28,387	565
イネツトムシ	6,485	1,450	500	3,600	7,600	294	3,856	102
コブノメイガ	50,660	29,638	15,000	31,000	33,700	13,835	33,136	302
フタオビコヤガ	154	0	50	700	1,490	632	2,028	—
アワヨトウ	226	80	50	750	55	528	961	3
イネヨトウ	1,315	350	1,000	5,100	990	1,250	2,677	—
イネゾウムシ	4,657	1,900	3,000	8,000	10,500	7,252	6,385	162
イネミズゾウムシ	370	2,298	3,550	3,644	1,838	9,938	3,408	250
斑点米カメムシ類	3,324	720	8,000	3,000	5,500	3,114	5,378	160
イネクロカメムシ	733	0	300	200	370	0	150	17
スクミリンゴカイ	1,098	303	240	6,066	64	625	958	48
総作付面積(271,968)	54,655	36,900	20,600	56,300	34,200	30,700	37,790	823

注) 防除面積は延面積を示す。宮崎・鹿児島などは早期・普通期の、沖縄は一、二期作の合計を示す。

特有な個体群の幾何級数的な増殖がみられなかったためと考察されたが、同時に徹底した防除活動の中でのプロフェジンの普及、飛来個体群の薬剤感受性の回復、さらに夏期の低温寡照も関係したと考えられる。

高密度に侵入したセジロウカカの集中的な産卵と吸汁による葉鞘変色葉が顕著に発生したが、8月上旬成虫の羽化と共に圃場密度が急速に低下し、葉鞘部の傷害も稲の生育と共に消失し被害はほとんどなかった。

コブノメイガによる食害が7月中旬及び8月中旬各地で多発し、一部で激発状態となったが、9月に入り発生密度は低下し、止葉への加害は少なかった。

ツマグロヨコバイは全般的には少発生であったが、鹿児島県の早期・普通期水稲混交作地帯では、早期稲収穫期の普通期稲への移入密度が高く、黄萎病の発生との関連で問題となっている。ヒメトビウカも少発生であったが、長崎、鹿児島両県で縞葉枯病ウイルス保毒虫率が5%以上の地点があった。

イネミズゾウムシは中山間地の早期及び早植え水稲を中心に発生面積が依然増加しつつあり、越冬密度が高かった地域では欠株などの被害が出た例もあった。

スクミリンゴガイの発生面積は昨年度の1.6倍に拡大した。熊本、宮崎県等では7月上中旬の大雨により用水路で増殖した貝が、大量に水田に侵入し稲への加害がめだち、被害面積は約9倍に急増した。

2. 畑作物

カメムシ類が福岡、佐賀、大分県内のダイズでやや多発した。ハスモンヨトウ、ミツモンキンウワバ、及びダイズ子実食害性害虫は一般的に少発生であった。佐賀県では出穂後のコムギにアブラムシが多発した。大分県ではサツマイモにドウガネブイブイとヒメコガネが、鹿児島県ではナカジロシタバがそれぞれやや多発した。また沖縄県のサツマイモ連作地帯ではイモゾウムシとアリモドキゾウムシによる夏秋期の被害が増加しつつある。

3. 野菜

アブラムシ類、ハダニ類、スリップス類、及びコナガが恒常的に発生しており、暖冬、少雨、初期防除の不徹底等により、一部でやや多発となった。

ミナミキイロアザミウマは佐賀、宮崎を除く各県のナス、キュウリ、ピーマン、スイカ、メロン、トウガン等でやや多発した。ネギアザミウマは佐賀、大分両県のタマネギ、及び鹿児島県のハネギでやや多発した。福岡県ではヒラズハナアザミウマによるイチゴの着色不良と肥

大停止が問題になっている。佐賀県でも本種による被害が確認された。アブラムシ類が佐賀、大分、鹿児島、及び沖縄県のイチゴ、ナス、メロン、レタス、カボチャ、サトイモ上でやや多発生した。

コナガは長崎、大分、及び沖縄県のキャベツとダイコンでやや多発生した以外は、平年並みあるいはそれ以下の少発生であったが、薬剤抵抗性が問題となっている。

シロイチモジヨトウが大分県のネギで9月に入って多発した。福岡県のネギ産地でも本種の発生が確認された。

ナモグリバエが鹿児島県内のエンドウとソラマメでやや多発生した。

キュウリとメロン上でのアルファルファタコゾウムシの新発生が長崎県で確認された。

4. 果樹

カンキツでは、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマ、ミカンハモグリガが主要害虫として常時多発している。ヤノネカイガラムシは天敵放飼により多発園が減少傾向にある。逆にゴマダラカミキリの発生が管理不良園で増加しつつある。チャバネアオカメムシの越冬密度が高く、越冬成虫によるカンキツ、ナシ、カキ、モモ等の幼果への被害が一部にあったが、果樹園内への飛来と被害は一般に少なかった。特に長崎、熊本県等では8月末の台風通過後誘殺数が激減した。しかし鹿児島県では台風後密度が急増し、極早生品種とキンカンに被害が出た。

カキクダアザミウマの発生分布が福岡、佐賀両県で拡大し、成虫による果実への被害が多発した。熊本県でも本種の発生が確認された。カツラマルカイガラムシが熊本県下の管理不良園で増加し、やや多発となった。

5. 茶樹

チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ、及びチャノホソガが重要害虫として常発しているが、宮崎県でチャノキイロアザミウマがやや多発した以外はおおね平年並みから少発生であった。福岡県と鹿児島県でチャハマキが、佐賀県でコミカンアブラムシがやや多発した。

6. 特用作物

沖縄県のサトウキビ連作地帯で、カンシャクシコメツキ類、アオドウガネ、サトウキビノチビアザミウマの発生が拡大し、多発傾向にある。

熊本県でイグサにイグサシムシガが多発した。

(九州農業試験場環境第一部)